

『往生論註』における往相・還相について

石 川 琢 道

一、はじめに

『往生論註』（以下『論註』と略す）所説の往相と還相の二種
廻向は、『往生論』（以下『論』と略す）並びに『論註』以前の
經論にその語句の起源を求めることは出来ず、曇鸞の創出に
よるものと考えられる。本稿ではこの往相・還相について、
これまでの拙稿と同様、後世の發展的理解との相違に留意し、
改めて曇鸞自身の意図に基づきつつ、その往相と還相の二種
廻向について整理し、併せて還相の思想背景について明らか
にしてゆきたい。

二、往相と還相の二種廻向の整理

曇鸞は廻向について『論註』に於いて一貫として、自ら集
めたすべての功德をすべての衆生に施し、共に仏道に向かう
ことと理解するが、これを弥陀淨土への往生を指向する五念
門内に理解する中、往相と還相の二種廻向という独自の理解

を示している。

卷下「起觀生信」において廻向門を註釈する中、

廻向有二種相^一。一者往相二者還相。往相者。以^二已功德^一迴^三施
一切衆生^一。作願共往^二生彼阿彌陀如來安樂淨土^一。還相者。生^三
彼土^一已。得^二奢摩他毘婆舍那方便力^一成就。迴^二入生死稠林^一教^三
化一切衆生^一共向^二佛道^一。若^二往若還皆爲^下拔^二衆生^一渡^中生死海^上。
是故言^二迴向爲首得成就大悲心故^一。

と述べるが、ここでまず往相とは、自らの功德を施し、衆生
と共に弥陀淨土への往生を作願することを言い、また還相と
は、往生以後に、奢摩他・毘婆舍那の方便力を成就したなら
ば、再び娑婆世界へと入り、すべての衆生を教化して共に仏
道へと向かうことを言う。そしてこの往相と還相の何れもが、
生死を繰り返す娑婆世界から衆生を救い取ることを目的とし
ている。

このように廻向の実践とは、往生以前並びに往生以後も繼
続的に行われるものであるが、菩薩の修道上において考えれ
ば、往生以前に行なう廻向の実践が往相、往生以後に行なう

廻向の実践が還相と分類される。

三、還相の思想背景について

周知のように、還相の思想背景として『論』所説の「園林遊戲地門」をその典拠に求めることが出来る。その点を考慮すれば、還相の廻向を創出した一次的な思想背景は『論』を指摘することが妥当であろう。しかしそのみが、創出への起因となったのか。ここではその特徴的な娑婆世界へと入るという菩薩の行相に注目し検討を進めてゆきたい。

筆者はこれまで曇鸞淨土教について愚考を重ねてきたが、仏身論等にも言えるように、その思想の多くが『智度論』等の四論系の経論に基づく。曇鸞が如何なる理由で『論』の註釈を行なうに至ったか定かでないが、少なくとも『論』の説示が、淨土教へと帰入する以前に修学したと考えられる涅槃や四論と相反する思想を有するものと曇鸞が考えたとは、その註釈姿勢をみる限り考えられない。むしろそれまでに修学した涅槃や四論を最大限に援用し、『論』の解釈を行なったものといえよう。以上の点から、『論』以外の経論の影響を考慮し、還相の思想背景を再検討したい。

先学の研究を窺うと、『無量寿経』の第二十二願をその背景として指摘するものが多い。『論』は『無量寿経』に対する論議（優婆提舍）である。このように考えると先学の指摘

通り『無量寿経』を思想背景とみることは一見合理的な見解とも思われる。しかし、曇鸞は『論註』に第二十二願を二箇所引用を行なうが、その何れにおいても弥陀淨土に往生した者が一生補処に至ることを主旨とする。恐らくこれまでの研究は、第二十二願中の「普賢之徳」に対する理解から導き出されたものと考えられるが、何れにしても曇鸞は二度に渡り引用を行なうにも関わらず、そこから還相へ通ずる理解を示しておらず、少なくとも曇鸞の理解によれば、この第二十二願をもって還相の思想背景とすることに合理性を導き出すことは出来ない。

そこで、次に『大品般若』及び『智度論』の影響について考えてみたい。還相の菩薩は、先述の通り往生を得た後の菩薩である。曇鸞は往生行を行なう菩薩の形相について、八地以上の平等法身の菩薩と、初地以上七地以下の未証淨心の菩薩の二種に分類して理解する。⁽⁵⁾この二種の菩薩の解説中、未証淨心の菩薩について以下のように述べる。

此菩薩願生安樂淨土⁽⁶⁾即見阿彌陀佛⁽⁷⁾見阿彌陀佛⁽⁸⁾時與上地諸菩薩⁽⁹⁾畢竟身等法⁽¹⁰⁾等。

ここで、下位にある未証淨心の菩薩が、淨土に往生し阿彌陀仏を見ることにより、上地の諸菩薩である平等法身の菩薩と身も法も等しくなるとの理解を示している。このように淨土への往生を境として、初地以上七地以下の未証淨心の菩薩か

『往生論註』における往相・還相について（石川）

ら八地以上の平等法身の菩薩へと、菩薩は階位、並びにその境界についても飛躍的な進趣をみるることとなる。

それに對し、還相の菩薩は往生を得た後の菩薩であることから、八地以上の平等法身の菩薩とみることが出来る。この平等法身の菩薩について、曇鸞は次のように述べる。

平等法身者八地已上法性生身菩薩也。（中略）此菩薩得報生三昧一。以三昧神力能一處一念一時遍十方世界。種種供養一切諸佛及諸佛大會衆海。能於無量世界無佛法僧一處上。種種示現種種教化。度脱一切衆生常作佛事。初無往來想供養想度脱想^⑦。

ここで平等法身の菩薩が報生三昧の境界にあると説示するが、既に拙稿に指摘した通り、この報生三昧とは『大品般若』及び『智度論』の他にみることが出来ない説示である。又、それは曇鸞の引用經論の用例からみても『智度論』に依ったものとみて間違いないであろう。

さて、ここで注意したいのは、『智度論』は菩薩が般若波羅蜜と相応し、また阿耨多羅三藐三菩提を得ることを目的とするが、その『智度論』にある報生三昧の境界によって、曇鸞が弥陀浄土への往生を得た菩薩の境界を説明する点である。即ちこれは『智度論』に示される、所謂、大乘菩薩道の実践上に、曇鸞が弥陀浄土への往生行を捉えていることを示すものと考えられる。

この報生三昧は『智度論』『発趣品』に説かれる。この「発趣品」は初地から十地へと至る菩薩の進趣について示されるが、その八地の菩薩が得る境界として説示される。

「常入三昧」者。菩薩得如幻等三昧。所役心能有所作。今轉身得報生三昧。如人見色不用心力。住是三昧中。度衆生。安隱勝於如幻三昧。自然成事無所役用。如下人求財。有役力得者。有自然得者。隨衆生所應善根。受身者。菩薩得二種三昧二種神通行得報得。知以何身。以何語。以何因緣。以何事。以何道。以何方便。而爲受身。乃至受畜生身。而化度之（八地竟）^⑧

「常に三昧に入る」、「衆生所応の善根に随つて身を受く」との内容は、『大品般若』に示される八地の菩薩が具足すべき五法の内、第四と第五にあたる。報生三昧について明確な内容規定は為されないが、注目すべきは続く「衆生所応の善根に随つて身を受く」との説示である。ここで、八地の菩薩は如幻三昧並びに報生三昧、更には二種の神通の行得と報徳を得て、衆生に對し、如何なる身、言葉、因縁、事象、道、方便をもつて行なうべきかを知り、その上で、身相を現し、場合によっては畜生にもなり衆生を化度する。その対象が衆生とあることから、八地の菩薩が欲界へと身を変じ、化度を行なうものと考えられる。

曇鸞は、『智度論』の説示を援用し、還相の菩薩と同位に

ある平等法身の菩薩について、報生三昧の境界にあると理解する。又『智度論』に於いてその八地の菩薩は、報生三昧を得た後、欲界へと身を変じ、化度を行なうと説示される。これは還相の菩薩の菩薩と同じ行相を有するものと指摘出来る。

四、まとめ

往相と還相の二種迴向は、何れも菩薩が主体者となり迴向を実践するその行相を現すものであり、それは共に衆生の救済を意図しつつも、往生以前並びに往生以後という弥陀浄土への往生を境とした二面性を示したものである。

またそのような二者、特に還相を指摘した背景は、先述の通り、一次的な思想背景は『論』である。「園林遊戲地門」に於ける、往生以後の菩薩が衆生の救済の為に娑婆世界に応化身を示して迴向するとの説示に依ったものであろう。しかし同時に、その思想背景は一義ではなく、曇鸞の意図する実践行全体の中で考えるべきである。往生以後の菩薩の境界を報生三昧と指摘するように、曇鸞は弥陀浄土への往生行を、『智度論』に示される大乘の菩薩の実践として捉える。そのような中、還相の思想背景について考えれば、還相の菩薩と同等にある八地以上の平等法身の菩薩が、『智度論』所説の報生三昧にあり、かつその菩薩は化度のために欲界にも生ずることを考えると、還相の菩薩の菩薩と同じ行相を有する菩薩の

存在を等閑視できない。むしろ浄土教帰入以前に『智度論』を修学していたとすれば、そのような認識のもとに『論』の「園林遊戲地門」を受容し得、かつ還相を創出し得たのである。

また最後に一言すれば、今回検討した往相と還相の二種迴向を生み出した重要な要因に、阿弥陀仏の存在を指摘出来る。還相の菩薩が欲界へと入ることが可能となるのは、八地以上の平等法身の菩薩であつた為である。未証浄心の菩薩が平等法身の菩薩となるためには、先述の通り、浄土に生じて阿弥陀仏をみることが不可欠となる。曇鸞が何故にこのような阿弥陀仏の存在を開顕し得たか、この点については今後の課題としたい。

- 1 拙稿『曇鸞「二種法身説」をめぐって』(『浄土學』第四十二輯・二〇〇五年)等を参照 2 大正四〇・八三六上 3 註一前掲拙稿参照 4 同・八四〇中、八四四上 5 拙稿『往生論註』における未証浄心の菩薩について(『印仏研』五一・二・二〇〇三年)参照 6 同・八四〇中 7 同・八四〇上 8 註五前掲拙稿参照 9 大正二五・四一八中〜下

(キーワード) 大品般若、智度論、報生三昧

(大正大学大学院研究生、浄土宗総合研究所研究員)

wish to point out in this paper that he was very interested in the fact that Amitābha is a saṃbhoga-kāya.

12. An Analysis of the Theory of *nianfo* in the *Lianzong Baojian*

Xin ZHANG

The *Lianzong Baojian* (T47, No.1973; 10 fascicles) by Youtan Pudu (1199–1277) is one of the most important works on Pure-land Buddhism in the Yuan dynasty (1206–1368). In this work, Putu encouraged the drawing of a clear distinction between correct *nianfo* practices and evil ones, through which he attempted to prove the justice of *nianfo* practice and to systemize the Pure Land Buddhist doctrines that had been developed in China so far. In this sense, the *Baojian* is extremely important for us to understand the development of Pure-land Buddhism during the Yuan; however, Buddhist scholars have not paid serious attention to it. This article attempts to analyze the theory of *nianfo* practices in the *Baojian* and to clarify the influences of some renowned patriarchs upon it.

13. On the “Aspect of Going” (*Wangxiang* 往相) and the “Aspect of Returning” (*Huanxiang* 還相) in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註

Takudō ISHIKAWA

The phrases for the two aspects of merit-transference, “aspect of going” (*wang-xiang* 往相) and the “aspect of returning” (*huanxiang* 還相), in the *Wangsheng lunzhu* 往生論註 are not found in sutras and commentaries before the *Wangsheng lun* 往生論 (*Treatise on Birth in the Pure Land*) and the *Wangsheng lunzhu* (*Commentary on the ‘Treatise of Birth in the Pure Land’*). Therefore, these two phrases are taken to be the creation of Tanluan. The philosophical background of the “aspect of returning” (*huanxiang*) has been considered to be “the gate of traveling in the forest” (*yuanlin youxidi men* 園林遊戲地門) as described in the *Wangsheng lun*. While I agree that this concept is its primary philosophical background, I believe that the concept in the *Mahāprajñā-*